

# 自己志向的完全主義と家族関係認知との関連<sup>(1)</sup>

中 川 明 仁

## 問題と目的

自分の立てた目標や与えられた課題を完全に達成しようとの信念を有することは、社会的にも望ましい姿勢で自らを向上させる上でも重要であると考えられる。しかし、全ての場面に亘って完璧を目指し、“完璧にできなければ失敗である”と考えるようになると課題の達成が困難となる。このようにあらゆる場面に亘って、過度に完全性を求める傾向を完全主義という(Burns, 1980)。Burns (1980)は完全主義者を「行動や容姿など自分に関することについて、極端に高い基準を設け、それを維持しようとする人であり、またその基準を少しでも達成できなければ失敗とみなし、自己評価を低めてしまいがちになる人」と定義した。

完全主義の基準とはBurns (1980)の定義するように自己に対して設けられるのが一般的であり、自己に対して完全性を求める場合を特に自己志向的完全主義と呼ぶ(Frost, Marten, Lahart & Rosenblate, 1990; 桜井・大谷, 1997)。桜井・大谷(1997)は自己志向的完全主義が4つの下位構造で構成されていることを確認し、自己志向的完全主義を多次的にとらえた20項目からなる多元自己志向的完全主義尺度(Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale: MSPS)を開発した。

自己志向的完全主義の4つの下位構造とは「高目標設定傾向」、「失敗懸念傾向」、「行動疑念傾向」、「完全性欲求」である。「高目標設定傾向」とは、自己に対して高度な目標を設定する傾向であり、「失敗懸念傾向」は些細な失敗を犯すことをも過度に気にする傾向で、「行動疑念傾向」は自分の行動に対して自信が持てずに漠然とした不安を抱く傾向である。そして「完全性欲求」は自己志向的完全主義の中でも中核的概念とされ、自分の行動全ては完璧に成し遂げられるべきであるとの信念を有する傾向である。

これらの下位構造を持つ自己志向的完全主義はどのような要因により規定され得るのであろうか。Hutchinson & Yates (2008)による、小学生から中学生を対象とした報告では、親からの期待が子どもの完全主義を高めることを示した。また、Damian, Stoeber, Negru, & Băban (2013)は15歳から19歳の青年期の子を対象とし、親からの期待を認知する傾向が高い者ほど、自分(子)が親から完全性を求められていると認知する傾向も高まることを報告している。さらに親からの期待という要因に加え、親との感情的交流の程度の低さ(Richter, Eisemann & Richter, 2000)や親の子に対する厳格さ(DiPrima, Ashby, Gnilka, & Noble, 2011; Randolph & Dykman, 1998)、さらに権威主義的な養育態度(Hibbard & Walton, 2014)が子の完全主義傾向を助長するとの報告

もある。上述のように親からの期待や親の養育態度など家族要因が完全主義を規定する1つの要因となっている。

しかしながら、既述の先行研究は全て家族関係に関する変数を質問紙調査により収集している。質問紙を用いた調査全般においていえることであるが、その回答には被調査者が社会的望ましさや個人的な都合により意図的に回答を操作することが可能であり(市川, 1991)、家族関係を把握する質問紙調査においてもそれは例外ではない。実際に家族関係に関する変数を質問紙を用いて測定することに批判的な立場をとる報告もある(Holden & Edwards, 1989; Holden & Miller, 1999)。Holden & Edwards (1989)は、質問紙法による限界点を踏まえた上で、観察法や面接法そして投影法を併用した研究により家族関係に関する変数は測定されるべきであるとしている。したがって、本研究では、投影法による家族検査を用いて、家族関係に関する変数を測定し、完全主義との関連について検討する。

本研究では投影法による家族検査として、秋丸・亀口(1988)が開発したFamily Image Test (FIT)を用いた。FITは家族の相互作用のプロセスの特性を、家族イメージ法という独自の方法によって把握することを目的に開発され、家族成員に見立てたシールを設定された枠内に配置することで、家族関係全体をイメージさせる検査である。家族療法において、家族成員間の相互作用を理解するための技法として、Kvebaek (1980)が開発したFamily Sculpture Technique (FST)があるが、FITはこのFSTを基本としてアレンジされた検査であり、検査結果は数量化されることで、客観的なデータとして分析することが可能である(前出・島谷, 2004; 中野・亀口, 1992; 大下・亀口, 1999)。FITの適切な分析指標の選択のため、柴崎・丹野・亀口(2001)はFIT図の父親、母親、大学生(子)に注目して検討を行い、その再検査信頼性の高さを確認している。

完全主義傾向者が具体的にどのような家族関係認知をしているのか、ということについてはこれまで質問紙による検討が主であった(e.g., DiPrim et al., 2011; Hibbard & Walton, 2014)。したがって、本研究では家族関係に関わる変数の側面をより拡大し、その基底を成すとも考えられる家族間全体における力関係や心理的距離感、また絆の強さなど、家族関係をより包括的にまた定性的に捉えながら、完全主義傾向者に特有な家族環境を明らかにすることを目的とした。

## 方 法

### 調査対象者および手続き

京都府内の私立大学に通う大学生181名の内、データに不備の見られなかった168名(男性48名、女性120名)を分析対象とした。平均年齢は男性が19.72歳( $SD=1.51$ 歳)、女性が19.54歳( $SD=1.25$ 歳)であった。心理学実験室内において、最多12名での集団法によって調査を実施した。調査項目の実施に際しては、質問紙法と投影法という異なる測度であるため、カウンターバランスがとられた。

測 度

自己志向的完全主義尺度

桜井・大谷(1997)による多次元自己志向的完全主義尺度を用いた。20項目から構成され、「高目標設定傾向」「失敗懸念傾向」「行動疑念傾向」「完全性欲求」の4下位尺度からなり、「全く当てはまらない(1点)」から「全くよく当てはまる(6点)」の6段階で評定を求めた。

家族関係の認知

秋丸・亀口(1988)によるFITを用いた。FITのB4版の検査用紙には、1辺15cmの正方形の枠が描かれ、その枠内に家族成員を表す円形シールを配置することで調査協力者がイメージする家族関係(像)を二次元平面上に作成する。円形シールは直径1.6cmで白から黒の5段階の色の濃淡により、家族成員間でのパワーの強さを表し、最も淡い色(白)から黒の順に1点~5点に得点化された。色が濃くなるほどパワーが強いことを意味する。そして、家族成員間を3段階の線で結ぶことで結びつきの強さを表現し、線は太くなるほどその成員間の結びつきが強いことを表す。最も弱い結びつきである破線から順に1点~3点に得点化された。

また、配置された家族成員間の距離を0.1cm単位で測定し、心理的距離間の指標とした。さらに、円形シール内の▲印により各家族成員の向きを表し、「向き合う」は二者の両方が向き合っている場合、また二者の両方が中心を向いている場合、そして片方が中心で他方が相手に向いている場合であった。「向き合わない」はそれ以外の場合とした。以上、家族関係認知の指標をまとめると、①シールの色の濃さによる家族内でのパワーの強さ②線の種類による成員間の結びつきの強さ③成員間の心理的距離④成員間の向きを分析の指標とした。以下にFITの概要図を示した。

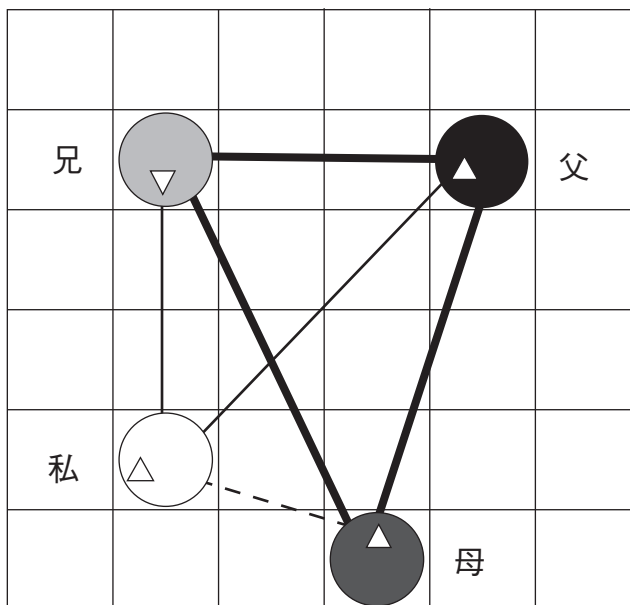


Figure 1. FITの概要図

## 結 果

### 各変数の基礎統計量および性差の検討

分析に先立ち、各変数の基礎統計量を算出し、性差の検討を行った結果、全ての変数において性差は認められなかった。その結果を Table 1 に示した。

Table 1. 各変数の基礎統計量および性差の検定結果

	男性		女性		t 値 (df = 166)
	M	SD	M	SD	
シールの濃さ					
父パワー	3.89	1.12	4.13	0.95	<i>n.s</i>
母パワー	3.75	1.07	4.05	1.14	<i>n.s</i>
自分パワー	3.04	0.86	3.18	0.99	<i>n.s</i>
シールの結びつき					
父子結びつき	2.48	0.19	2.27	0.20	<i>n.s</i>
母子結びつき	2.67	0.13	2.86	0.13	<i>n.s</i>
父母結びつき	2.66	0.18	2.47	0.19	<i>n.s</i>
シール間の距離					
父子距離	5.21	3.21	5.53	3.54	<i>n.s</i>
母子距離	4.89	3.05	4.34	2.98	<i>n.s</i>
父母距離	5.24	3.51	5.32	3.46	<i>n.s</i>
自己志向的完全主義					
高目標設定	20.99	2.89	20.89	2.76	<i>n.s</i>
失敗懸念	17.57	3.21	17.98	2.79	<i>n.s</i>
行動疑念	21.21	3.41	21.47	2.88	<i>n.s</i>
完全性欲求	19.67	3.12	19.54	3.01	<i>n.s</i>

### 完全主義と FIT の各指標との相関

自己志向的完全主義の各側面と FIT の各指標との関連を検討するため、Pearson の積率相関係数を男女別に算出し、その結果を Table 2 に示した。

男性においては完全主義と FIT の各指標との間には有意な相関関係は認められなかったが、女性においては、母親のパワーが「高目標設定傾向」および「完全性欲求」との間で有意な負の相関を認め、母子間の結びつきもまた、「完全性欲求」との間で負の相関を認めた。さらに、母子間の距離は「高目標設定傾向」と「完全性欲求」との間で有意な正の相関を示していた。

### FIT の各指標が自己志向的完全主義の各側面に与える影響についての検討

FIT の各指標が自己志向的完全主義の各側面に与える影響について検討するため、重回帰分析を男女別に行った。その結果を Table 3 に示した。

男性においては、FIT が自己志向的完全主義の各側面に有意な影響を及ぼしていなかったが、

Table 2. 各変数間の相関

	高目標設定	失敗懸念	行動疑念	完全性欲求
父パワー	.065	.056	.102	.110
	.154	.096	.106	.132
母パワー	.143	-.092	.032	.109
	-.247 *	.109	.117	-.276 *
自分パワー	.201	-.184	.093	.183
	.106	.118	.084	.171
父子結びつき	.176	.165	.091	.201
	.180	-.098	.108	.097
母子結びつき	.021	.046	-.008	.054
	-.109	.118	.102	-.289 *
父母結びつき	.078	.005	.065	.021
	.098	.018	.004	-.006
父子距離	.065	.008	.192	-.032
	.193	.034	.132	.124
母子距離	.069	.112	.102	.043
	.258 *	.181	-.043	.306 **
父母距離	.004	.032	-.032	.104
	.021	-.007	.104	.042

注：上段：男性，下段：女性。\* $p<.05$ ，\*\* $p<.01$

Table 3. FIT を説明変数，自己志向的完全主義を目的変数とする重回帰分析

	高目標設定	失敗懸念	行動疑念	完全性欲求
父パワー	.058	.055	.097	.114
	.150	.102	.104	.113
母パワー	.132	-.102	.042	.097
	-.249 *	.098	.115	-.280 *
自分パワー	.189	-.174	.105	.187
	.102	.121	.083	.168
父子結びつき	.168	.165	.102	.193
	.183	-.101	.104	.098
母子結びつき	.034	.042	-.006	.048
	-.104	.120	.101	-.286 *
父母結びつき	.081	.002	.046	.031
	.099	.017	.004	-.008
父子距離	.059	.006	.183	-.041
	.201	.041	.133	.127
母子距離	.054	.098	.099	-.028
	.260 *	.181	-.040	.301 **
父母距離	.003	.041	-.035	.112
	.018	-.004	.103	.041
$R^2$	.269	.201	.249	.267
	.441 **	.239	.241	.483 ***

注：表中の数値は標準偏回帰係数を示す。

上段：男性，下段：女性。\* $p<.05$ ，\*\* $p<.01$ ，\*\*\* $p<.001$

女性においては、母親のパワーが「高目標設定傾向」および「完全性欲求」に対して有意な負の影響を及ぼしていた。また、母子間の結びつきもまた「完全性欲求」に負の影響を及ぼしており、母子間の距離が「高目標設定傾向」および「完全性欲求」に正の影響を及ぼしていた。

また成員間の向きについては、父子間、母子間、父母間の向きを対象とした上で、自己志向的完全主義の各側面の得点の高低(平均値により分割)および「向き合う」と「向き合わない」の $\chi^2$ 検定を行ったが、いずれも有意な偏りは認められなかった。

## 考 察

本研究の目的は、完全主義傾向者を取り巻く家族環境について、親子間の性別による影響を仮定しながら、投影法検査であるFITを用いて検討することであった。分析に先立ち、FITの基礎統計量を算出した結果、パワーおよび結びつきについては、データの散らばりが小さいことがその特徴として示されたが、距離については、被調査者間での散らばりが比較的大きかった。大きな散らばりが示された理由として、図面全体を使って家族像を完成させる者や図面の一部に偏って家族像を完成させる者に分かれていたことが考えられる。図面全体を使えば必然的に家族成員間の距離は長くなる。描画法などの投影法検査ではそのサイズそのものが描く人の環境への関わり方や両親との関係を表すとも考えられている(高橋, 2011)。FITは描画法とはいえませんが、図面全体を使って家族像を表現する者と図面の一部を使って表現する者との間にも心理的特徴の差異が示されているのかを、たとえば、家族像全体の面積を指標にするなどして検証する意義はあると考えられる。

次に重回帰分析の結果であるが、男性はFITのどの指標も自己志向的完全主義と有意な関連は認められなかったが、女性はいくつかの指標が自己志向的完全主義の一部に影響を及ぼしていた。特に母親に関する指標との間で関連性が認められていたのが特徴である。まず、母親のパワーは、子ども(娘)の「高目標設定傾向」および「完全性欲求」を低減させ、母子間の結びつきもまた「完全性欲求」を低減させていた。つまり、家族内で母親の影響力を強く認知しているほど、子ども(娘)が自己に対して高い目標を設定することを避け、さらに母子間の結びつきを強く認知しているほど、課題や目標の達成において完全性を志向しなくなるということである。

一方で、母親との距離感を長く認知しているほど、自己志向的完全主義の上述の二側面が強まっていたことから、自分に対して高い目標を設定したり、課題の達成に際し完全性を追求する女性は、母親の自分への影響力は少ないと認知し、結果的に母-娘間の結びつきも希薄であると捉えている可能性もある。これらの結果より、母親からの働きかけが少ないほど特に娘の完全主義傾向が高まることが考えられ、この結果は、中川・佐藤(2005)で示された、母親の愛情が欠落し統制的な関わりが強くなるほど、子ども、特に娘の完全主義傾向が低下するとの結果と通ずる側面があるといえる。

また、父親と息子間における完全主義の規定機序の問題であるが、息子が認知する FIT の父親に関する指標との間には関連性は認められなかったことから、同性の親子間であっても、母-娘と比較すると父-息子の関係は強いものとはいえないことが示唆される。Vieth & Trull (1999)は親子間での完全主義の規定機序に関して、同性の親子間での関連の強さを提示している一方で、父-息子間の関連は母-娘間の関連と比べると、その強さは比較的弱い関連であることを示しており、本研究の結果もそれを一部支持する結果といえるであろう。また、Soenens & Elliot (2005)においても、同性の親子間での関連について、娘の完全主義には父親というよりも母親の養育変数が影響するが、息子の完全主義に父親の養育変数が影響するとは限らないと報告している。

本研究の結果より、男性(息子)の完全主義の規定機序に関しては今後のさらなる検討が望まれるが、母親-娘間における完全主義の規定機序は、母親が過剰に干渉せず、娘の自律性が充足される比較的自由度の高い家族環境であることが考えられた。

本研究の限界として、投影法による家族検査を用いたといえども、あくまで子によって認知された家族関係を変数としている。実際の家族関係がその認知にどの程度反映されているのかはわかり得ない。今後の課題としては、子に加えて両親に対しても同様の検査を実施し、子の家族への評価と両親の家族への評価の両方を測定し、ズレの程度や一致している程度を考慮した検討が求められる。

## 謝辞

本研究の実施に際し、ご指導いただいた佐藤豪教授(同志社大学心理学部)に深謝申し上げます。

## 注

(1) 本論文は2014年度に同志社大学大学院文学研究科へ提出した博士論文の研究の一部を加筆・修正したものである。

## 引用文献

- 秋丸貴子・亀口憲治(1988). 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究, 2, 61-74.
- Burns, D. D. (1980). The perfectionist's script for Self-defeat. *Psychology Today*, November, 34-52.
- Damian, L. E., Stoeber, J., Negru, O., & Băban, A. (2013). On the development of perfectionism in adolescence: Perceived Parental expectations predict longitudinal increases in socially-prescribed perfectionism. *Personality and Individual Differences*, 55, 688-693.
- DiPrima, A. J., Ashby, J. S., Gnilka, P. B., & Noble, C. L. (2011). Family relationships and perfectionism in middle-school students. *Psychology in the Schools*, 48, 815-827.
- Frost, R. O., Marten, P., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 449-468.
- Hibbard, D. R., & Walton, G. E. (2014). Exploring the development of perfectionism: The influence of parenting style and gender. *Social Behavior and Personality*, 42, 269-278.
- Holden, G. W., & Edwards, L. A. (1989). Parental attitudes toward child rearing: Instruments, issues, and implications. *Psychological Bulletin*, 106, 29-58.

- Holden, G. W., & Miller, P. C. (1999). Enduring and different: A meta-analysis of the similarity in parent's child rearing. *Psychological Bulletin*, **125**, 223-254.
- Hutchinson, A. J., & Yates, G. C. R. (2008). Maternal goal factors in adaptive and maladaptive childhood perfectionism. *Educational Psychology*, **28**, 795-808.
- 市川伸一(1991). 心理測定法への招待—測定からみた心理学入門— 梅本堯夫・大山 正(監) 新心理学ライブラリ13 サイエンス社.
- Kveback, D. (1980). *The Kveback family sculpture technique*. Jonesboro: Pilgrimage.
- 前出朋美・島谷まき子(2004). 家族イメージ法の分析指標の検討—肯定的家族観・父子関係・母子関係・両親関係との関連— 学苑・人間社会学部紀要, **761**, 40-47.
- 中川明仁・佐藤豪(2005). 完全主義と認知された養育態度および精神的健康との関連 同志社心理, **52**, 16-25.
- 中野まり・亀口憲治(1992). 思春期の子どもとその両親の家族イメージ 福岡教育大学紀要, **41**, 283-290.
- 大下由実・亀口憲治(1999). 中学2年生の家族イメージの研究—父, 母, 子の3者関係イメージ 家族心理学研究, **13**, 1-13.
- Randolph, J. J., & Dykman, B. M. (1998). Perceptions of parenting and depression-proneness in the offspring: Dysfunctional attitudes as a mediating mechanism. *Cognitive Therapy and Research*, **22**, 377-400.
- Richter, J., Eisemann, M., & Richter, G. (2000). Temperament, character and perceived parental rearing in healthy adults: Two related concepts? *Psychopathology*, **33**, 36-42.
- 桜井茂男・大谷佳子(1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **68**, 179-186.
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治(2001). 家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析 家族心理学研究, **15**, 141-148.
- Soenens, B., Elliot, A. J. (2005). The Intergenerational Transmission of Perfectionism: Parents' Psychological Control as an Intervening Variable. *Journal of Family Psychology*, **19**, 358-366.
- 高橋依子(2011). 描画テスト 北大路書房.
- Vieth, A. Z., & Trull, T. J. (1999). Family patterns of perfectionism: An examination of college students and their parents. *Journal of Personality Assessment*, **72**, 49-67.